

審判の日



審判の日

「天は喜び、...地は楽しみ、...野は喜び、その中にあるすべてのものは喜びなさい。...森の木々はみな、主の前に喜びなさい。主は来られるからである。...義をもって世界を裁き、真実をもって民を裁かれる。」

詩篇96:11-13

聖書が教える、全人類に対する未来の審判の日は、慰めと希望に満ちたものである。それは、主が「義をもって世を裁き、真実をもって民を裁く」ために来られることを喜び祝うよう招く、本文の教えと一致している。使徒パウロはアテネのマルスの丘で語る際、この日の到来を確証した。彼は人々に、神がイエス・キリストによって「義をもって世界を裁く」日を定められたこと、そして「彼を死者の中からよみがえらせたことによって、すべての人に保証を与えられた」ことを告げた。使徒行伝17:31

主が救いの計画の中で備えられた将来の審判の日は、義人に報いが与えられ、悪人に罰が下される時以上のものです。それはまた、人々が関わる問

題について完全な知識に基づいて、主に従うか背くか、義を選ぶか不義を選ぶかの機会を与えられる、試練の時でもあります。

これは、審判の日が24時間の普通の日ではなく、聖書が教えるように千年に及ぶ一つの時代であることを意味する。実際、それはキリストが地上を統治する千年の期間と同一であり、彼は王であると同時に審判者となる。この時代におけるイエスの忠実な従者たちは、千年の間、彼と共に王として仕え、また世界の審判の業を彼と分かち合うのである。 黙示録20:4；コリント人への第一の手紙6:2

聖書のこの美しく調和のとれた教えは、個々人の永遠の運命が死の瞬間に神によって不可逆的に決定されるという誤った見解によって覆い隠されている。この考えを支持する聖句は存在しない（ただし、この福音の時代にキリストを受け入れ、神への奉仕に生涯を奉献する者たちに関しては別である）。

それどころか、イエスはご自身の教えを受け入れない者たちは今ではなく、後に裁かれると述べられました。「だれでもわたしの言葉を聞いても信

じない者は、わたしが裁くのではない。...わたしが語った言葉が、終わりの日にその人を裁くのである。」（ヨハネ12:47,48）。この言葉は、未来の幸福な審判の日に人々が「真理」によって裁かれるという本文の約束と、なんと美しく調和していることか。なぜなら、イエスの言葉こそがまさに真理だからである。

現在の審判の日

イエスが「今、わたしの言葉を信じない者は裁かれない」と述べたことは、信じる者、すなわち弟子となる者が現時点で裁きを受けることを示唆している。これは確かに真実である。しかし、その完全な意味を理解するには、聖書においてこの文脈で使われる「裁き」という言葉が、単に判決を下すこと以上の意味を持つこと、すなわち判決に至るまでの試練の概念も含むことを認識する必要がある。

したがって、聖書ではクリスチャンは今まさに試練のさなかにあると語られている。ペテロは「あなたがたの信仰の試練」について語り、それが「朽ちる金よりもはるかに尊い」と述べている。（ペテロの手紙一 1:7）。また彼はこう記している。

「あなたがたを試すために火のような試練が臨むのは、何か珍しいことが起こったかのように思っ
てはならない」（ペテロの手紙一 4:12）。明らかに、クリスチャンの受ける試練は厳しい。しかし
それに見合うほどに報いは大きい。「死に至るま
で忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあな
たにいのちの冠を与える」（黙示録 2:10）。

クリスチャンの「火のような試練」すなわち裁き
について述べた後、ペテロはさらにこう説明して
いる。「裁きが神の家から始められる時が来た。
もしまず私たちから始まるなら、神の福音に従わ
ない者たちの終わりはどうなるだろうか。義人で
さえかろうじて救われるのに、不敬虔な者と罪人
はどこに現れるだろうか」（ペテロの手紙一
4:17,18）。この箇所は、現在の時代が「神の家」
である信者たちに対する裁きの時であることを明
確に示している。

これは主の裁きの働きののはじまりに過ぎない。ペ
テロは問う。「不敬虔な者と罪人はどこに現れる
のか（裁きのために）？」この箇所で使徒は自ら
の問いに答えず、ある者は「不信者には将来の裁
きはなく、彼らは永遠の苦しみを受ける場所に現
れる」と結論づける。

しかしイエスは異なる答えを与えられた。前述の通り、聞くのに信じない者は現世では見過ごされ、「終わりの日」に御言葉によって裁かれると宣言された。（ヨハネ12:47,48）。この驚くべき確約において、主は不信者の裁きがこの世の生活では行われないこと、彼らの永遠の運命に関する決定は今下されず、「終わりの日」まで下されないことを明確にされている。

「終わりの日」という表現は、個人の現世における最後の日を指すものではない。マルタが兄ラザロについて「終わりの日の復活の時に、彼がよみがえることを知っています」と言った時にも、同じ表現が使われている。（ヨハネ11:24）。「最後の日」が復活の時であることを留意せよ。それはキリストの千年の治世と審判の日であり、人類を罪と死から贖い回復させる神の計画における最後の大いなる日、すなわち最終段階である。

既に引用した聖句から明らかなように、今や生涯にわたる試練に直面しているのは、主に奉献された信徒のみである。彼らには二度目の試練期間など存在せず、この事実を立証する聖句がクリスチャンにのみ適用されることに気づかなければ、現

世以外には誰にも試練の期間がないと誤解しがちである。

しかし、まだ罪の宣告下にある者が生涯にわたる試練を受けることはありえない。キリストを救い主として受け入れず、神の御心を行うために自らを奉献していない者すべてが、まさにその立場にある。一方、信者は信仰に基づいて、父なるアダムを通して人間に下った裁きから免れる。主の御前に立つ新たな立場において、彼らは「いのちの義認」を得ており、そこには「いかなる裁きもない」のである。ローマ5:18; 8:1

このことが将来の審判の日と関連して持つ意味は、イエスがこう言われたときに明らかにされている。「わたしの言葉を聞き、わたしを遣わした方を信じる者は、[信仰によって]永遠の命を持ち、裁き[ギリシャ語「クリシス」、審判を意味する]を受けることはない。むしろ、死から命へと移されたのである。」（ヨハネ5:24）。これは、信じる者が信仰によって今すでに死から命へと移され、将来の裁きを受けることはないことを明示している。彼らの裁き、すなわち審判の日は今この時なのである。

世界の将来の審判の日の目的とその結果を理解しようとするなら、この偉大な真理を考慮しなければならない。例えば、それは、罪人が聖徒から分離される時であり、その分離は各人が死んだ時に既に下された決定に基づくという見解を排除する。なぜなら、イエスは「聖徒」、すなわち彼の真の従者たちが、その将来の審判には全く現れないと強調しているからである。

復活において

既に引用したように、イエスは信じる者は死から命へと移ると述べました。これは当然、信仰に基づくものです。神の観点から、彼らはもはや裁きの下にありません。ヨハネ5:29でイエスが言及しているのはこの人々であり、善を行った者は「...命の復活へと出て来る」と記されています。彼らの裁きの時は過ぎ去り、復活において、彼らは「忍耐をもって善を行い続けた」ことで熱心に求めた「栄光と誉れと不死」をもって報いられる。ローマ人への手紙2:7

悪を行った者たち

イエスは、復活が「善を行った者」だけのものではないと保証している。なぜなら、墓にいる者すべてが御声を聞いて出て来るからである（ヨハネ 5:28）。しかし次の節が宣言するように、善を行った者だけが「いのちの復活」へと出て来る。なぜなら「悪を行った者」は「さばきの復活」へと出て来るからである。イエスが用いたギリシャ語は「クリシス」であり、一般的な訳はこれを「裁き」と誤訳している。

ギリシャ語の「クリシス」は決定的な試練の時、あるいは経験を意味する。クリスチャンにとってこの決定的な試練は現世にあり、もし彼らがこれを成功裏に通過すれば、復活において命へと立ち上がる。しかし他の者たちは皆「裁きの復活」、すなわち彼らの審判の日へと立ち上がる。彼らにとって、永遠の運命が決まる大いなる危機は、死の眠りから目覚めた後に訪れるのである。

世界のための将来の千年試練の時代は、ある意味で人類に対する第二の審判となる。最初の審判はエデンの園で下された。それは私たちの始祖に対する審判の日であり、その結果は全人類に共有さ

れた。その試練、すなわち危機において、アダムは神の律法に背き、死の宣告を受けた。遺伝によって、その子孫もまた彼の罰を分かち合った。使徒パウロが記したように、「一人の罪によって、すべての人が罪と定められて裁きを受けることになった」のである（ローマ5:18）。

神はアダムに御心、すなわち律法について啓示された。「善悪の知識の木の実を食べてはならない」と主は言われた（創世記2:17）。これは単純な律法であった。複雑な点も、理解が難しい点も何一つなかった。アダムの裁きは、彼に啓示された真理に反する道を選んだ結果であった。彼の不従順は死をもたらしただけでなく、理解力の喪失も招いた。神とその御心に関する闇は、彼の「墮落」の必然的な結果であり、アダムの子孫もまた彼からこの「闇」の遺産を受け継いだ。イザヤはこの世界の一般的な状態をこう描写している。「闇が地を覆い、深い闇が民を覆う。」イザヤ書60:2

しかし神は、ご自身が創造した人間への愛を絶やすことはなかった。むしろ「神はこの世を愛された」ゆえに、愛する御子を遣わし、アダムとその子孫を死から贖われた。またキリストを通して、世界が啓蒙される道も備えられた。それゆえイザ

やは民の「深い闇」を描写した後、こう付け加えた。「しかし主はあなたの上に昇り、その栄光はあなたの上に現れる。異邦人はあなたの光に、王たちはあなたの輝く光に、やって来る。」（2-3節）

これに従い、イエスは「わたしは世の光である」（ヨハネ8:12）と宣言された。また、イエスこそが「世に生まれるすべての人を照らす」真の光であると告げられている。（ヨハネ1:9）。イエス・キリストの御顔に輝く福音によって、まだ「すべての人」が照らされているわけではない。人類の大多数に関しては、ヨハネが述べた通り「光は暗闇の中に輝いている。しかし、暗闇はそれを悟らなかった」という事実が今も真実である。（ヨハネ1:5）

確かに、光を理解しない者はそれを受け入れ、喜ぶことはできません。だからこそイエスはこう言われました。「わたしの言葉を聞いても信じない者を、わたしは裁かない」（ヨハネ12:47）。弟子たちにはこう言われました。「あなたがたの目は見えているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ」（マタイ13:16）。（マタイ13:16）イエスが、御言葉を聞いても信じない者を今裁

かないと説明された時、その理由として御自身と御業に当てはめて引用された預言を挙げられました。「神は彼らの目を盲目にし、心を頑なになさった。それは彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改めて、わたしが彼らを癒すことがないためである。」（ヨハネ12:40）

イエスは言われた。「神は、御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世を救うためである。」（ヨハネ3:17）。この裁きから解放される唯一の条件は、まことの光であるキリストを信じることである。しかし、今なお人々全体が光を理解していない以上、将来の啓示と裁きの日が必要であることは明らかである。

聞くべき死者たち

私たちはすでに、今、主の言葉を聞いて信じる者たちが、信仰によって今、そして実際に復活において命を受けること、そしてこれらの者が将来、世界と共に裁きを受けることはないことを保証する主の言葉を引用した（ヨハネ5:24）。しかし、28節と29節は、この希望を大きく広げている。イエスはそこで「墓にいる者たちはみな、その声を聞いて出て来る」と断言される。死の前に信じ、

忠実であることを示した者たちは、その時に即座に永遠の命に入る。他のすべての人々には、信じるための十分な機会が与えられ、信じる者は生きるのである。

死後に真理を聞き信じる機会が与えられるという考えは、一部の人々にとって新たな概念だろう。しかしこれは聖書的な考え方である。聖書は、キリストを通していのちを受ける機会が現在に限定されるとは決して述べていない。すべてのクリスチャンは、神が罪人に対して憐れみ深く忍耐強いと信じている。しかし何らかの理由で、神の憐れみは人が死ぬ時までしか及ばず、最後の息を引き取る瞬間を過ぎれば神はその個人に憐れみを示せないという誤った見解が受け入れられてきた。

この限定的な見解を支持する聖書的根拠は存在しない。神の視点から見れば、信仰を持たない世界全体は罪の中に死んでいる。そしてイエスの初臨の四千年前から、神は裁きを受けた世界が死の眠りにつくままに任せて、彼らを啓蒙し救うための何らの働きもなさなかった。救い主・救い主としてイエスを遣わされたことは、神が人間という被造物を愛しておられた証拠である。しかし彼を通していのちを受けるためには、彼らは信じなけれ

ばならない。ところがキリストが来られる前に死んだ何百万もの人々は、確かに彼を信じる機会を持っていなかった。

それ以来、救われるべき唯一の名（天の下、また人の間で与えられた）を聞く機会すらなく、信じることのできなかつた無数の者が死んでいった（使徒言行録4:12）。さらに、イエスご自身の証言によれば、その教えを聞く者の多くは、そこに関わる問題を理解していない。こうした人々のために、イエスが彼らを裁いておらず、後で御言葉によって裁かれるという確信を与えてくださったことを、神に感謝しよう。

「御言葉によって」

イエスが「自分の言葉」によって不信仰者を最終的に裁くと述べたことは、あの幸いな時に主が「御自身の真実をもって」人々を裁くと宣言する聖句と調和している（詩篇96:13）。これは美しい考えである。すなわち、全人類が神に関する真理によって啓発され（ ）、この啓発に基づいて従順と命を得る機会が与えられることを意味する。

聖書にこれほど明確に教えられているこの輝かしい事実は、そうでなければ矛盾しているように見える聖書の多くの箇所や約束を焦点化させる。例えば、ヨハネ1:9はイエスを「世に来るすべての者を照らすまことの光」と述べる。確かに、キリストが来られる前に死んだ者たちにはこれは当てはまらなかった！その後も無数の人々には当てはまらなかった。しかし、この聖句が真の意味を持つのは、将来の啓示の日が約束されているという祝福された確信があるからだ。

その日、すなわちキリストの千年の治世に関する驚くべき預言の中で、「主の知識が地を満たす。海が水を覆うように」という約束がなされている。イザヤ書11章9節

ゼパニヤは、使徒パウロが「この悪しき世」と表現した社会秩序の崩壊の中で今まさに成就しつつある啓示的な預言において、この苦難の時代の後、主が「民に純粋な言葉（メッセージ）を授け、彼らがみな主の御名を呼び求め、心を一つにして主に仕えるように」とされると告げている。ガラテヤ人への手紙 1:4; ゼファニヤ書 3:8,9

預言者エレミヤは、主が「イスラエルの家とユダの家との間に新しい契約を結ばれる」未来の時を語り、その時神の律法が人々の心に書き記されると説明しています。主の知識は普遍的となり、「小さい者から大きい者まで」すべてが主を知るようになるのです。エレミヤ書31:31-34

使徒パウロは言う。「神は...すべての人々が救われ、真理を知るようになることを望んでおられる。なぜなら、神は唯一であり、神と人との間の仲介者も唯一、すなわち人であるキリスト・イエスだからである。この方は、すべての人のための身代金としてご自身をささげ、そのことは定められた時に証しされるのである。」テモテへの手紙—2:3-6

一見すると、ここに示された順序は、まず真理の知識を得て、その知識に基づいて信仰を持ち救われるべきだと主張する他の聖句と矛盾しているように思える。なぜなら、ここでは使徒がまず「救われる」ことについて語り、その後で真理の知識を受けると言っているからだ。

しかしこの場合、パウロが用いる「救われる」という言葉は、福音への信仰と従順によってもたら

される永遠の救いを指すのではない。むしろ、救われるために与えられた唯一の名を知らずに死んだ者すべてが、死から目覚めさせられ、真理を知る機会を得ることを神の御心として告げているのである。言い換えれば、パウロは「救われる」という言葉を、イエスが「墓にいる者すべてが御声を聞いて出て来る」と約束されたことを描写するために用いているのである。

永遠の命を得るためにすべての人々が学び受け入れねばならない偉大な真理とは、イエス・キリストが神の恵みによって「すべての人のために」死を味わわれたことである（ヘブル2:9）。パウロはこれを「すべての人のための身代金」と呼び、この偉大な真理こそが「時が満ちた時に証しされる」べきものである。「定められた時」という表現は非常に重要である。これは、人類の贖いと救いに関する神の愛に満ちた計画が、秩序立った予め定められた計画の中で進展し、神の愛の設計のあらゆる要素にそれぞれ定められた時があることを示している。現在の時代、そして現在の生活は、ある者たちが真理を理解し、それゆえに信じ従うための定められた時である。千年期の間、そして啓蒙されていない世界が死から目覚めた後、彼らにとって福音が理解できる形で証しされる定めら

れた時が来る。その時こそ、彼らが従い生きるべき定められた時となる。

「そして書物が開かれた」

黙示録20章12-15節は、世界の将来の審判の日に関する聖書の中でも特に興味深い箇所の一つである。この象徴的な預言において、人々の将来の啓発は、書物が開かれるという概念によって描かれている。この審判の日の驚くべき描写はこう記されている：

「私は、大小の死者たちが神の御前に立つのを見た。書物が開かれ、また別の書物、すなわちいのちの書が開かれた。死者たちは、その書物に記されたこと、すなわち彼らの行いに従って裁かれた。海はその中にいた死者たちを渡し、死と陰府もその中にいた死者たちを渡し、彼らはそれぞれ自分の行いに従って裁かれた。死と陰府は火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に記されていない者は、みな火の池に投げ込まれた。」

キリストの千年の治世の間、死者たちが目覚めさせられるとき、彼らは「神の御前に立つ」のであ

る。これは、キリストの贖いの業によって、元来の罪の宣告がもはや彼らに対して効力を失い、各人が信じる機会、従う機会、生きる機会を与えられるという意味である。しかし、この 機会は、神の恵みのさらなる現れを必要とする。「書物」が開かれなければならない。

これは「主は御自身の真実をもって」人々を裁かれることを象徴的に示す表現である（詩篇96:13）。「書物」には真理が記されており、開かれねばならない。閉ざされたままでは真理は隠され、人々は「それを悟らない」からである。

もちろん、この箇所で言及される書物には、死んだ者すべての過去生の記録が記されており、審判の日にこれらの書物が開かれ、誰がふさわしく誰がふさわしくないかが明らかにされるという見解を一部の人々が抱いていることは承知している。しかしながら、この預言が裁かれる者の「行い」を「書物」とは別個に言及している点に留意すべきである。裁きは書物に記された事柄に基づき、「その行いによって」なされると述べられているからだ。要点は、裁きが彼らの行いが書物に記された真理にどの程度合致しているかに基づくということである。

結局のところ、主は罪人の行いの記録を調べ、その者が命に値するか否かを判断する必要はない。聖書が「正しい者は一人もない」（ローマ3:10）と述べるように、主はすでに知っているからだ。たとえイエス・キリスト（ ）の足跡をたどる者でさえ、自らの不完全な行いで裁かれれば、命に値しない者となるだろう。

主は、自らの義によって命に値する者は一人もないことを知っておられる。しかし神の愛は、キリストへの信仰、すなわち彼の「言葉」と、彼の血による驚くべき備えへの信仰を通して、裁きからの逃れの道を備えられた。しかし信仰の基盤となる知識がなければ、真の信仰はありえない。それゆえ、その知識が与えられるため、千年の審判の日に「書物」が開かれるのである。

神は自らを解き明かす方であり、イザヤ書29章11-18節で再びこれらの象徴的な「書物」と、その開かれることの含意について語られる。この箇所では「封印された書物」が学識ある者に、次に無学な者に渡されるが、どちらもその内容を「読む」ことも理解することもできないと記されている。

ついにその書は開かれる——「その日には、耳の聞こえない者がその書の言葉を聞き、目の見えない者の目が暗闇の中から、闇の中から見ようになる」と。「その日」と呼ばれる時代は、文脈から明らかにキリストの御国の時代を示している。そしてその日についての約束がこう記されている。「柔和な者もまた 主における喜びを増し加え、人のうち貧しい者もイスラエルの聖なる方において喜ぶであろう。」19節

「その行いに応じて」

黙示録20章12節から15節の審判の日の預言において、「神の御前に立つ」死者は、主によって悪人であると知られている者たちである。彼らは、イエスが「悪を行った者たちは、裁きの復活のために現れる」と約束されたときに語った者たちである。（ヨハネ5:29）。したがって、ここで言及されている「わざ」とは、彼らが開かれた書物のメッセージを知り、聞き、それに応答した後の、御国における彼らの行いを指さねばならない。

預言は「別の書物」も開かれると述べる。それは「いのちの書」と称される。神の御前に立ち、書物に記された事柄への従順に基づいて裁かれる死

者たちは、かつて死の書に名を記されていた。彼らは皆アダムの「書」に属していたのである。パウロはこの考えを少し異なる表現で述べている。

「アダムにおいてすべての人は死ぬ」と。しかし彼は付け加える。「キリストにおいてすべての人は生かされる」と。コリント人への第一の手紙 15:22

こうして、キリストのいのちの書は人類のために開かれる。そして、死から目覚め、啓発された罪に定められた人類のひとりひとり（ ）が真理を受け入れ従うとき、その名は書に記される。このいのちの書が開かれるのは、そこに誰の名が記されているかを確認するためではなく、「その行いによって」真理への愛を証明した者たちの名を書き加えるためである。人々はその真理によって裁かれるのである。詩篇 96:13

火の池

黙示録20:13は、死と地獄が死者を引き渡すと述べている。それゆえ死者は神の御前に立つ機会を得る。地獄、すなわちギリシャ語原文のハデスとは、苦痛の場所ではなく死の状態を指す。死者が地獄から戻った後、死と地獄の両方が「火の池」に

投げ込まれる。これは「第二の死」と表現されている（14節）。火の池で滅ぼされるすべてのものが二度死ぬからではなく、死の刑罰が二度目に科されるから「第二の死」と呼ばれるのである。

火の池、すなわち第二の死においては、死そのもののさえも滅びる。この地の最終的な清めには、最終的にいのちの書に記されていないすべての者の滅びが含まれる。彼らは 火の池、すなわち第二の死に投げ込まれるが、それは苦しめられるためではなく、滅ぼされるためである。

主が御自身の真理をもって人々を裁かれるあの栄光の日こそ、彼らにとって恵みの時となる。「主の裁きが地にあるとき、世界の住民は正義を学ぶ」（イザヤ書26:9）。（イザヤ26:9）。しかしその時でさえ、故意に悪を行う者たちは真理に従うことを拒む。これについて次の節は宣言する。「しかし悪しき者に恵みが示されても、彼らは義を学ばない。正しい地にあっても、彼らは悪を行い続け、主の威光を顧みない。」イザヤ26:10

「正義の土地」という表現は、キリストの支配下にある地上の状態を形容している。ペテロも同じ時代を指してこう述べている。「私たちは、神が

約束された新しい天と新しい地、すなわち神の義に満ちた世界を待ち望んでいる。」（ペテロの手紙二 3:13）。ペテロはこの新たな人類の時代を「不敬虔な者たちの裁きと滅びの日」と呼んでいる（ペテロの手紙二 3:7）。それは彼らすべてにとって滅びを意味する。なぜなら彼らは「民の中から滅ぼされる」からである（使徒言行録 3:23）。

しかしペテロが示すように、その時に真理が示されたにもかかわらず、それを聞こうとも従おうともしない者だけが、不敬虔な者として明らかにされ滅ぼされる。真理の啓発的な影響のもとで、彼らの故意の性質が露わになるのである。

羊と山羊

来るべき審判の日に関するもう一つの教訓は、イエスの羊と山羊のたとえである（マタイ 25:31-46）。このたとえが適用される時期は、冒頭の節によって特定されている。「人の子が、その栄光のうちに、また、聖なる御使いたちをすべてともにして来るとき、そのとき、彼はその栄光の座に着くであろう」。イエスは千年の治世の間、「栄光の御座」に着座される。ギリシャ語本文では、栄光のうちにキリストと共に来る「天使たち」は「

使者たち」と訳される。これは彼の教会、すなわちこの時代に信仰を持ち、死に至るまで忠実を証明した者たちを指し、彼らは副王・副審判者としてイエスと共に栄光を受けるのである。

この「栄光の御座」の前に、すべての国々が集められ、羊と山羊が分けられるように分けられると、たとえば述べる。これは教会と世の間の分け隔てではない。なぜなら教会は主と共に御座にいるからである。むしろ、この分け隔ては、以前啓示を受けず、不信者として死んだ世の人々の間で起こる。彼らは「小さな者も大きな者も」死んだ者であり、「神の前に立つ」時、「書物」が開かれる。その時、信じる者もいれば従う者もいるが、従わない者もいる。ゆえに二つのグループに分かれるのである。黙示録20:12

あらゆる民族が、その未来の審判の日の場面に参加する。イエスは別の機会に、審判の日に「ソドムやゴモラ」よりも、御自身を拒み迫害した者たちの方が「耐え難い」と語った（マタイ10:15）。これは、遠い過去のあの邪悪な都市の住民たちが死から目覚めさせられ、悔い改め、信じ、生きる機会を与えられることを意味する。

イエスを拒んだイスラエル人よりも、あの邪悪な都市たちの方がまだましだと言われるのは、彼らがそれほど多くの光に背いて罪を犯したわけではないからだ。しかし、すべての人にとってまだましなのだ！すべての人々が目覚め、啓発され、その光、すなわち真理に従うならば、永遠に生きるに値すると裁かれるのである。

たとえ話において、「羊」の群れは、助け合いと協力の精神ゆえに報いを受ける。イエスは弟子たちにこう言われた。「わたしは、あなたがたに新しい戒めを与える。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ13:34）。真理の書、すなわち人々を裁くためのイエスの言葉が開かれる時、命に値すると認められた者たちに対する神の要求の根幹は、神の愛の理解と実践、すなわち自己よりも隣人への関心を促すこの偉大な無私の原則にあることが明らかになるでしょう。

この性質は羊の群れに備わっている。ゆえに彼らは、イエスの歓迎の言葉「さあ、わたしの父に祝福された者たちよ、世の基礎が据えられた時からあなたがたのために備えられた王国を受け継げ」を聞くのである。（マタイ25:34）。これは地上

の王国であり、元来は最初の両親に与えられたが、彼らが神に背きエデンの園から追放されて死に至る運命となった時に失われたものである。千年の審判の日が終わる時、この王国は当時資格を満たすすべての人々に回復される。ペテロがこの回復を「復元」と表現しているのはこのことである。使徒3:20-23

たとえ話の「山羊」とは、黙示録20:15に記される、いのちの書に名前が記されていない者たちである。彼らはイザヤ書26:10の悪しき者たちであり、使徒行伝3:23の者たちである。彼らは当時の偉大な教師の言葉を聞くことを拒み、「民の中から滅ぼされる」者たちである。

イエスによれば、山羊の階級は「永遠の罰へと去って行く」が、羊は永遠の命を受ける（マタイ25:46）。この文脈における「罰」（ ）という言葉は、ギリシャ語で「切り離す」を意味する語に由来する。つまり「山羊」は命から切り離され——滅ぼされるのである。41節ではこれが火によって象徴化されている——火は人類が知る最も破壊的な手段の一つであり——「悪魔とその使いたちのために用意された」ものである。

確かに、神に感謝すべきことに、悪魔とその共にある不敬虔な天使たちさえも、黙示録の著者が「第二の死」と宣言する象徴的な火の池で滅ぼされる。一方、すべてのアダムの子孫は、キリストの贖いの業を通して与えられた神の恵みを受け入れる十分な機会を与えられている。完全な啓示にもかかわらず、真理を信じ従うことを拒む者以外は、誰も命を失うことも、救いを得られないこともない。

神の恵みと愛の広大さをこのように拡大して見る時、私たちはこれまで以上に神に仕え喜ばせたいという強い願望を抱くべきである。なぜなら失われた人類のための神の救いの計画に協力する驚くべき機会が与えられているからだ。キリストを通していのちの賜物を受けることは神の恵みの素晴らしい現れである。しかしそれ以上に、私たちはキリストを通して、失われた世界を和解させる働きにおいて、神とその愛する御子と協力するという高い栄誉を与えられている。

人類にまだ備えられている驚くべき祝福、すなわち千年王国の審判の日に人々に臨む祝福を考えれば、詩篇の作者が「主は地を裁きに来られる」ゆえに、すべての被造物に主を賛美するよう呼びか

けたのも不思議ではない。なぜなら「主は義をもって世界を裁き、真実をもって民を裁かれる」からである。詩篇96:13